

ネパール義援金100万円贈る 鹿児島大が留学生と研究員に



住吉・研究国際担当理事（左）から目録を受け取ったビベックさん（中央）とボハラさん

ネパールで4月に起きた大地震を受け、鹿児島大は28日、学生や教職員らから寄せられた義援金100万7200円をネパール人の留学生と研究員計2人に贈った。2人は「多くの支援をいただき、ありがたい」と感謝。日本赤十字社や国際NGOなどに送金し、被災者への支援に役立てたいとしている。

ともに家族は無事だったが、甚大な被害が出た母国の現状に心を痛め、大学の国際事業課に被災地支援への協力を依頼した。大学は浄財を募ることを決め、5月上旬、義援金箱を鹿児島市の郡元キャンパスに設置。さらに教職員にメールで協力を呼びかけるなどしてきた。

贈呈式は同キャンパスで開かれ、住吉文夫・研究国際担当理事が2人に目録を手渡した。

ビベックさんは「多くの支援に感謝する。雨期が迫

っているので、避難所の整備などに役立ててもらいたい」と語った。地震後に首都カトマンズの病院で1週間、ボランティア活動をしたというボハラさんは「精神的に大きなショックを受けている人が多い。長期的な支援が必要になる」と話していた。

読売新聞 31

鹿大留学生ら支援訴え

ネパール 地震 母国へ義援金100万円

鹿児島大学（鹿児島市）のネパール人留学生が母国の地震被災者への支援を呼びかけ、同大の教職員や学生らが協力して約100万円を集めた。28日、同大で義援金目録を受け取った医歯学総合研究科博士課程4年のビベック・アリアルさん（31）は「支援が行き届かない人たちにとって大きな力になる」と話した。



義援金を受け取るビベック・アリアルさん（中央）とマノズ・ボハラさん（右）＝28日、鹿児島市の鹿児島大学

アリアルさんと同研究科特任研究員のマノズ・ボハラさん（31）が大学側に支援を相談した。ネパール首相災害

救済基金や日本赤十字社など3団体を通じて現地へ贈られる。

脳外科医のボハラさんは地震1週間後、家族の暮らす首都カトマンズに戻り、現地の病院で1週間働いた。「体と心のリハビリが必要。1カ月後にモンスーンが迫っている。被災者の住む場所の確保を急ぐべきだ」

アリアルさんは「日本からの気持ちに感謝している。義援金は壊れた建物や学校の修復、傷ついた人や子どもへの支援に使ってもらえるようにしたい」と話した。（福留梓）

27.5.29

南日本新聞

23